塚、西の犬鳴山第八経塚、南の中津川第七経塚を結ぶ修験の道の要衝にあたっている。

秤木ノ宿から五本松の間には、『続風土記』に記された「大人足跡」として「[13]秤木宿の北二十五町許にあり、地の凹みたる形足跡に似たり、長五六間幅廣き所二間許」、「三重ノ瀧、曽舞知、行者の隠水など唱ふる所あり、又養老ノ瀧と唱ふる所あり」とあるが、確認することはむつかしい。

秤木ノ宿跡

秤木の金剛童子

[13]復刻版第一輯七一六頁。

二、犬鳴山の行場と燈明ヶ岳の経塚

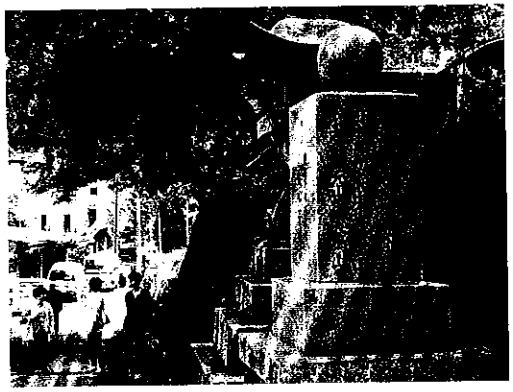
元山上という犬鳴山

泉州の樫井川の上流、犬鳴川の谷あいは、巨岩怪石の渓谷美で有名な犬鳴山である。

一般には、南海本線泉佐野駅からと、JR和歌山線粉河駅から熊取駅前を結ぶバスを利用して、犬鳴山で下車して参詣する。

すぐ犬鳴山の参道となる。入口に「南無不動明王」の石碑があり、「元文三年（一七三八）正月十五日」と刻まれている。また「犬鳴山不動尊参道」には「本堂一三三四米、総門三七五米」などの距離が記され、さらに「葛城二十八宿修験根本道場、元山上犬鳴山、大本山七宝瀧寺」の石碑がたっている。

近畿三十六不動尊、第三十三番霊場でもある「命乞い犬鳴山倶利伽羅大龍不動明王」として近在の尊崇は厚い。


犬鳴山の参道

寺伝には、「斉明天皇の七年（六六一）役の行者の開基で、大和大峰山より六年早く開創せられたため、元山上と言われ葛城二十八宿修験根本道場となった」とある。

犬鳴川の渓谷を滝の音と苔むした巨石の道を進むと、「迎への行者尊」が出迎えてくれる。

やがて「瑞龍門」の額がある朱塗りの門を入り、谷にそって七つの滝の名称をみながら奥の院の不動堂につくと、その奥に行者ノ滝がある。不動堂内には不動明王が祀られ、加持祈禱が行なわれている。

山内には多くの石仏や板碑があり、また山名となった義犬[1]の墓がある。とくに板碑は、永和二年（一三七六）、長禄二年（一四五八）など南北朝期を中心に、葛城大先達で高野山僧の奉納が多い。

燈明ヶ岳の第七経塚

さて、修験の道は、粉河寺から北へ中津川の行者堂をへて、第七経塚のアラレの宿から尾根ぞいに秤木ノ宿の金剛童子に詣で、車道を北進し、犬鳴山の南にそびえる燈明ヶ岳の受記品第八経塚に勤行する。

この経塚山へは、犬鳴山の本堂下の巨大な不動明王像の広場から右脇の細い急坂をつづらおりに登る道もある。この道には可愛らしい金

犬鳴山の不動堂

①猟師が義犬によって毒蛇の難をまぬがれたという伝説で犬鳴山の名となった。

剛童子の石像がいくつも出迎えてくれる。

頂上は雑木林で、それほど展望はよくないが、森閑とした山頂からは周辺の山並みや大阪湾あたりが木の間がくれにみえる。

南面して、石壇の上に、二基の石祠と板碑がある。右の石祠は経塚で、扉はしまっている。左の板碑には、「バク」（釈迦如来）の種子の下に「一乗妙典、五百弟子受記品第八」[2]、「長禄三年（一四五九）十月十五日」と刻した七六㌢の経塚碑がある。この年号は第四経塚の桜地蔵の経塚に次いで古いものである。

なお右側の石祠には、「願主、男里村大工太助方安兵衛」「嘉永二年（一八四九）五月」と刻されている。

この経塚の左前に「経塚」と刻された、古い和泉砂岩の石碑、右前に「玉美大神」と刻された自然石がたっている。

そして右側の樹幹に、碑伝が六枚とりつけられていて、犬鳴山と聖護院・熊野那智山のものであった。

毎年一一月中旬に、この少し先にある石祠の前の護摩壇で護摩供養が行なわれる。

ここは西に展望が開け、大阪湾や関西空港が見渡せる山頂である。山頂から西へ尾根を伝っていくと、烏天狗が祀られる天狗岳にでる。

燈明ヶ岳の金剛童子

②五百の阿羅漢（仏教の聖者）と修行すれば、普明如来の仏になることができると受記（予言）された。

燈明ヶ岳の第八経塚

和泉砂岩に彫られた天狗の立像は珍しい。付近に「バク」（釈迦如来）の板碑や七宝瀧寺の碑伝があり、信仰の石碑が散らかっている。ここから尾根は急坂となり、犬鳴山の入口に下っており、通称「ころげ坂」と呼んでいるが引き返す方がよい。

この燈明ヶ岳の名について、『和泉名所図会』は[3]「当山の絶頂をいふ。西の海面を闇夜に渡海の船、方角を失ふの時、当山の不動尊を念する時、此峯に燈明輝くといふ」と記され、船からの目印でもあったと伝えている。

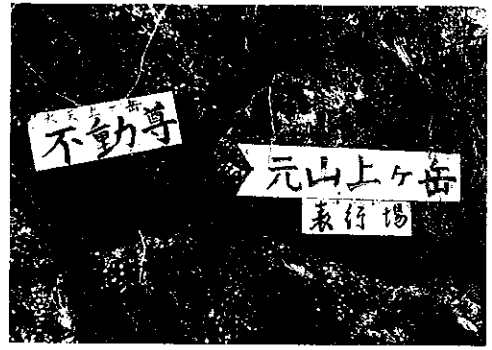
表の行場と裏の行場

ここから犬鳴山本堂への急坂を下りたところに、東側に「裏行場」、西側に「蛇腹」の行所がある。裏行場は、北岸の「表行場」より危険で、木の根や岩伝いのため一般には立入禁止とされている。また「蛇腹」は、燈明ヶ岳と天狗岳の間の浸食谷にできた巨石がおり重なった地形で、ほかに大峰の観音峰や大和の都介にもある。古い二万五千分の一の地形図にも「蛇腹」と記されている。

燈明ヶ岳からの下り道に「裏行場」の標示板があり、「蛇腹の道行場道」として、「蛇腹（金龍大神、鶴地蔵尊）、地蔵ヶ岳（地蔵尊、福槌大

犬鳴山の烏天狗

③復刻版三二一頁。



犬鳴山の表行場口

権現）馬の背から燈明ヶ岳不動尊」と記された案内板がたっている。

そしてその入口に「奥之院行場口」と額の掛かった鳥居があり、注連縄がはられて行所の入口となっている。

この裏行場に対し、北岸の山が表行場である。本堂の手前から左手の山への登り口に「元山上ヶ岳、表行場」の標識がある。少し行くと矢印で「元山上ヶ岳」とあって、すぐ鎖のある一枚岩の斜面の行所がある。また「地獄岩」の標示板があり、道の左手が崖となり、「西の覗き」がある。あちこちの行所には綱がはられいまも修行が行なわれている。

やがて行者の祠、般若心経塚、護摩場があって、七月七日に「元山上ヶ岳峯供養」の柴灯大護摩が奉修される。

ここから登ると高城山頂に達するが、修験の道は右側の山腹をかけ下り行者ノ滝の上流へ出て、表行場を終わるのである。

女人大峰の山

犬鳴山七宝瀧寺は、七つの名瀑の存在で名称となったが、『寺記』に、前九条殿下植通公の詠じた歌に、

おもひきや　七の宝の瀧にきて

表行場の道

④七宝瀧寺の「寺記」で、『和泉名所図会』の復刻版三二一頁。

裏行場の道標

六のにごりを　きよむへきとは

とあり、また『和泉名所図会』の作者、秋里籬島も

豆蔦に　みちをもとめつ　瀧の水

と詠じている。

この犬鳴山には、室町時代の板碑が多く、当時の繁栄ぶりを伺うことができる。しかし天正の兵火で、本堂以外の諸堂は焼失したが、江戸期に再興され、犬鳴山の智航上人によって『葛嶺雑記』を編著された。

明治の「修験道廃止令」で衰退し、明治七年（一八七四）に高野山金剛峯寺の末寺となった。しかし第二次世界大戦後の昭和二五年（一九五〇）には、真言宗犬鳴派を復興した。

とくに大峰山金剛界の女人禁制に対し、犬鳴山胎蔵界は、「女人大峯」といわれ、大祭の五月五日には男女ともに柴灯大護摩供大祈禱会、火渡り修行が最高潮に達するのである。

犬鳴山の柴灯護摩

三、和泉葛城山の雨乞いの神と経塚

雨乞いの峰

和泉山脈のほぼ中央に位置する和泉葛城山の山頂は、和歌山県那賀町に属するが、古くから紀州と泉州の雨乞いの山として尊崇されてきた。

海抜八五八㍍の山頂一帯は、ススキ原の隆起準平原で展望はよい。南に紀ノ川平野と紀州の山並みが望まれ、紀州富士といわれる龍門山はひときわ美しい。これに対し北側は、貴重なブナの原生林で、天然記念物に指定されている。

山頂へは四周から車道がつき便利になっている。そして尾根道は「紀泉高原スカイライン」のドライブ道が通り、粉河町の経営する「ハイランドパーク粉河」のレストランや駐車場があり、山小屋風の食堂もある。

和泉葛城山の峰

修験の道は、このドライブ道にほぼ並行して尾根伝いにあった。犬鳴山の経塚山や志野峠からアラレの宿のあった第七経塚をへて、秤木ノ宿のある金剛童子の祠からの道は、五本松で合い、尾根を東へ進み葛城山頂に達する。さらに北へ下ると牛滝山の経塚へのコースをとることができる。

和泉葛城山は、南に紀ノ川平野、北に和泉の平野の穀倉地帯をもち、その水源として古くから雨乞いの神、峰の龍王を祀っている。

紀州側には、山頂への登り道に「葛城龍王」と刻された自然石がたち、山頂には立派な鳥居に「八大龍王」の額が掛けられ、玉垣に囲まれた石祠がある。左に「龍王神社」の石碑がたっている。

そしてその右に「法華経授学無学人記品第九経塚」の白いポールがたち、雨乞いの神である龍王の石祠が、葛城二十八品の経塚でもある。[1]

龍の宿と経塚

鎌倉初期の『諸山縁起』や安土桃山期の『葛城峰宿次第』は、ともに「龍宿、龍多輪」「人記品第九」と記し、また幕末の『葛嶺雑記』も「嶺の龍王」「金剛童子祠」「授学無学人記品第九之地」と記している。

和泉葛城山のブナの木

①学の有る人も無い人も、すべて宝相如来の仏になれると記別（保証）された。

『紀伊続風土記』の名手荘葛谷村に「金剛童子石秀倉」として、「葛城の山峯、泉州の界にあり、山伏の行所なり。泉州牛瀧並に大坂辺に行く者これを道路とす」とあり、[2]

智航上人は、この龍の宿を、

峯高き　たつの宿りのここかしこ
　　経の力や　道香るらむ

と、龍王の宿と経塚の存在を詠んでいる。

玉垣内の花崗岩の石祠は、高さ一㍍二五㌢、幅七二㌢で石扉は固く、中を伺うことはできない。

大阪府教育委員会の『歴史ノ道調査報告書』[3]には、「岸和田藩の家老が正保二年（一六四五）に造立した石殿がある。金剛童子は約三十間紀州側に移したという」とある。

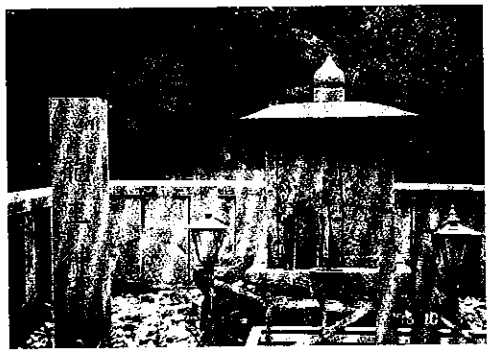
葛城山と神於寺

聖護院執事長宮城泰年[4]氏は、石祠内の金剛童子について、「正面の一枚扉をのけると、中に高さ三十、巾二十余㌢の石碑がある。正面に『カン（金剛童子）、泉州神尾寺、天正□□□月』と微かではあるが、はっきりと陰刻してある。一五七三～九二年のもので四百年前である。

②復刻版第一輯七二九頁。

③同報告書第七集『宗教の路・船の路』四四頁。

④宮城泰年「葛城の経塚を巡って」その七、『本山修験』二二号一九九二年。



龍王神社の第九経塚

神尾寺というのは、今の塔原から岸和田方面へ行き、高速道をくぐった近く、神於の地にある『神於寺』のことであろう」と記されている。

この神於寺[5]は、和泉葛城山から北流する津田川が神於山につきあたる位置にある。

この神於寺の背後の神於山の山上には、雨の神を祀る神於寺の鎮守、宝勝権現社の跡がある。『神於寺縁起』には、白鳳一二年（七世紀後半）役行者が開創し、新羅国から飛来した雷神（宝勝化人）を寺内に勧請したとある。現在、寺地は不動堂の奥に移されている。

平安時代からは、密教・修験道系の山岳寺院として発展したと思われ、修験の山伏らは行人衆といわれ、永正三年（一五〇六）の寺宝である法螺貝がある。その後、天正の兵火で焼失し、いまは参道の左右に塔頭堂舎跡の石壇があり、本堂の大日堂と不動堂・薬師堂などが現存している。不動堂には本尊不動明王と旧行者堂の役行者像が安置されている。

このことから神於寺の金剛童子の名が葛城山上に祠られている由来がわかる。

この紀州側にある嶺の龍王神社に対し、泉州側の嶺の龍王社、葛城神社は、同じく石鳥居と玉垣でかこまれた入母屋形の石祠が祀られている。

⑤日本歴史地名大系28『大阪府の地名』II一四三二頁・平凡社一九八六年。

神於寺への参道

『和泉名所図会』の「石宝殿」には「岸和田城主より石室をいとなみて、葛城山一言主神を勧請す。これより土人、葛城山、或は石宝殿と口称す」とある。[6]

幕末の『葛嶺雑記』は、「嶺の龍王」として、「塔原村の山頂に有、五ケ村の氏神といふ。本社八大龍王晴雨にかかはらず、此の高ねに氏子の輩、日供を運び奉る」とあり、祭神は、一言主命と八大龍王である。そして「五ケ村」とは、山頂より北流する津田川ぞいの塔原・相川・河合の三村と、北西流する近木川ぞいの蕎原・木積の二村で、いずれも和泉葛城山を源流とする農村である。

なお紀州側の龍王神社の石祠の前には、七宝瀧寺・那智山青岸渡寺・醐青連の碑伝が供えられていた。

⑥復刻版二七〇頁。

泉州側の龍王社

一三、牛滝山と大沢の里

牛滝の経塚石

和泉葛城山から北へのドライブ道は牛滝山に下っている。その途中に「二十一丁地蔵」が祀られている。ここから左へ入る道が「丁石地蔵道」といわれる旧道で、牛滝山大威徳寺の境内に通じている。

牛滝山は、背後の和泉葛城山・大石ヶ峰からの水を集め牛滝川となって流れ下る。水は境内を流れ一ノ滝をはじめ多くの瀑布がかかり静寂な修験の行所となっている。

山門を入って三〇㍍ほど行くと、右手に苔むした大きな自然石に「カンマン（不動明王）」の梵字が刻まれ、般若心経の筒と碑伝がおかれている。これが葛城二十八品の一つ、「①法師品第十経塚」である。ゆるやかな石段を登り中門を入ると伽藍となる。

『葛嶺雑記』は、「本堂、大威徳明王、大師堂なそ真言宗瀧本坊支配。其余、護摩堂、不動尊、神変大士、二重塔の大日如来なそ天台宗穀屋坊支配、惣門の中に経石あり。妙法師品第十之地」とあり、この経石が現存する経塚である。

『和泉名所図会』には「②いにしへは石蔵五山といふ。坊舎四十宇あり、本坊方は真言宗、穀屋方は天台宗」とあり、『葛嶺雑記』以外の記事として、「求聞持堂、鎮守社、蛭子大黒社、天照太神社、鐘堂、閼伽井」がある。

なかでも、ひときわ姿のよい多宝塔は、永正年間（一五〇四～二一）の建立で国の重要文化財になっている。また塔に相対して建つ重厚な本堂は伽藍をひきしめている。

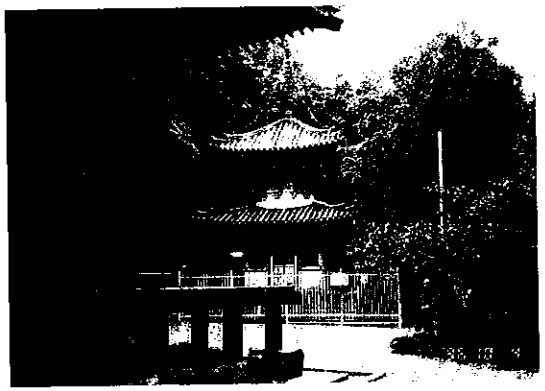
また牛滝山の開創と名称について、『和泉名所図会』は、「③当山は、役優婆塞、開創し給ひ、厥后、弘法大師、恵亮和尚も、経歴して中興し給ふ。いにしへは石蔵五山となづく。転法輪の嶺あり。（中略）初メ、役行者こゝに来ッて第二の滝の上に修練し、不動尊を彫刻して、これを安置す。今の明王堂なり。（中略）叡山の大乗坊恵亮和尚、此山に来ッて大威徳の法を修す。其時、大威徳寺、第三の滝より涌出し給ふ。騎る所の牛は、潭心の臥石、これなり。其石の長、四丈。瀑布、これを挟んで飛流る。恰、青牛の水より躍り出づるに似たり。恵亮

牛滝山の第十経塚

①薬王菩薩をはじめとする八万の菩薩に向かって、仏の在世も滅後も法華経の一言一句を聞いて喜び修行する者は成仏できるという。

②復刻版二五六頁。

③復刻版二五七～二六〇頁。



牛滝山の多宝塔

（中略）一刀三礼し、大威徳寺の像を造る。今の本尊これ也。至此、嚴重滝を牛滝といふ」とあって、牛滝山大威徳寺の山号と寺名の由来を伝えている。

また「一山に楓多し。秋の末には、紅錦を布が如し。麓より峯まで、紅葉ならぬ所はなし」と秋の牛滝山の風情を賞している。

普照院宮元瑤法親王九一歳とあり、

暮ぬとて　さても覚へす紅葉はの
　　下てる山の　入相のかね

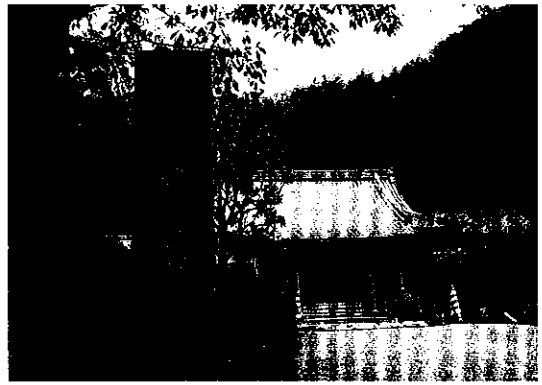
と詠じている。

大沢の修験の里

牛滝山から三キロほど下った大沢町には、高座山転法輪寺と浄福寺の跡がある。

転法輪寺は、大沢町の中程で、牛滝川の南岸、山の麓にある。「浄土宗、転法輪寺」の標石を左にみて、広い境内の正面に瓦葺きの本堂がある。本堂正面に「転法輪寺」の額が掛かり建物は新しい感じをうける。

『和泉名所図会』には「④開基役小角、〔峯中記〕大沢転法輪寺に、手越井、滝穴、高座石、行道石、大黒窟等の名区あり」とある。この



大沢の転法輪寺

④復刻版二五六頁。

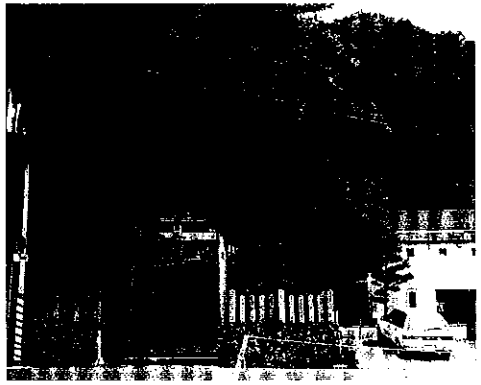
石などは現在の寺の南の山中にあり、役行者修行の地とされているので、寺の山号も高座山転法輪寺となっている。しかし、いまはその行所も忘れ去られようとしている。

それより下流の神福寺跡は、大沢神社の右隣にあって神宮寺であり、真言宗の寺であったが、いまは大沢町の「大沢山荘」の集会所となり、寺にあった十一面観音や弘法大師、不動明王像は、その下流の地蔵堂に移されたといわれている。

いま大沢の里では、以前あった「一心講」を復活して修験の行事をしている。それでも大峰巡行はしているが、地元の葛城の峰修行は行なわれていない。

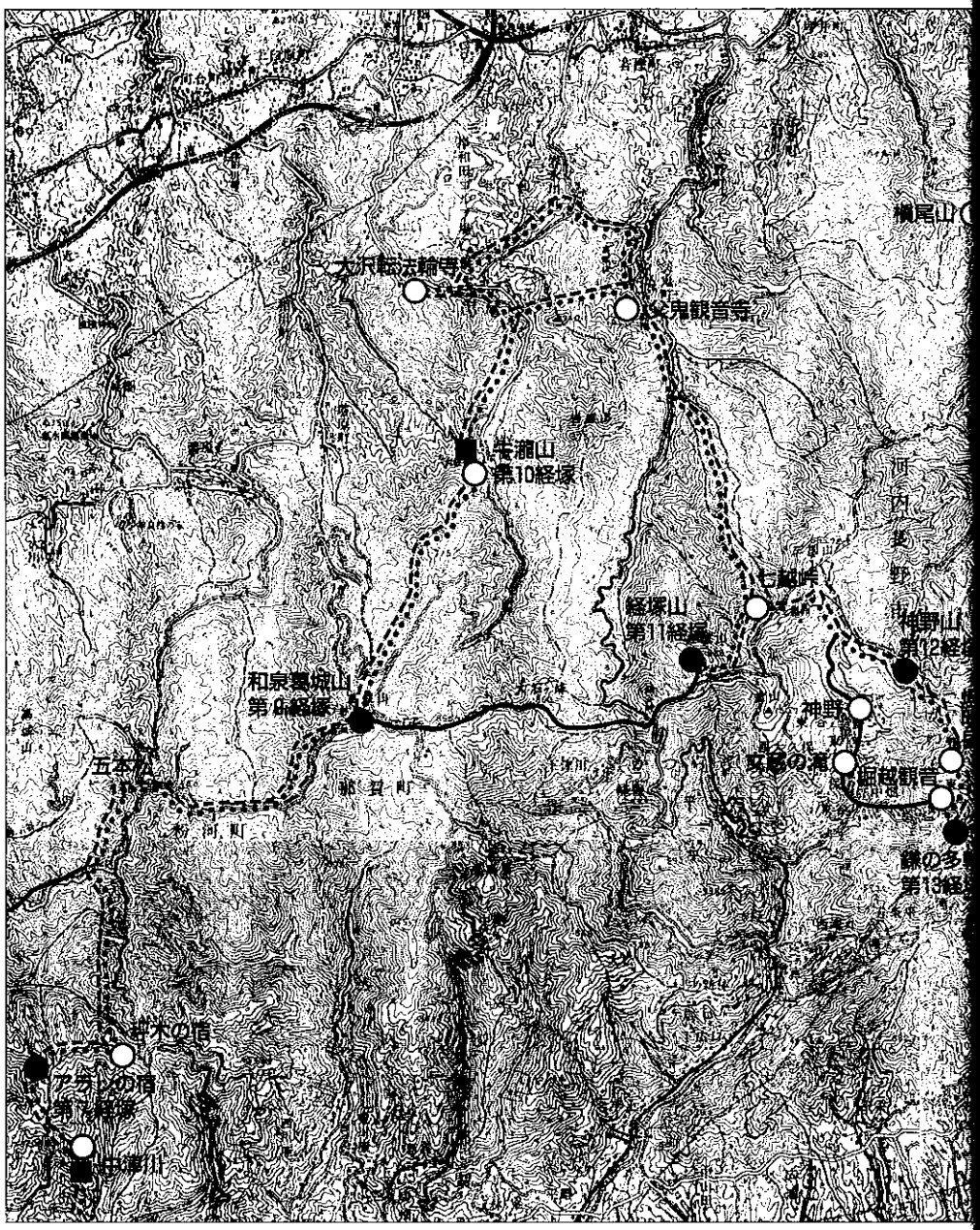
この大沢町から東へ大沢峠かその南の本田峠を越えた所に父鬼町がある。

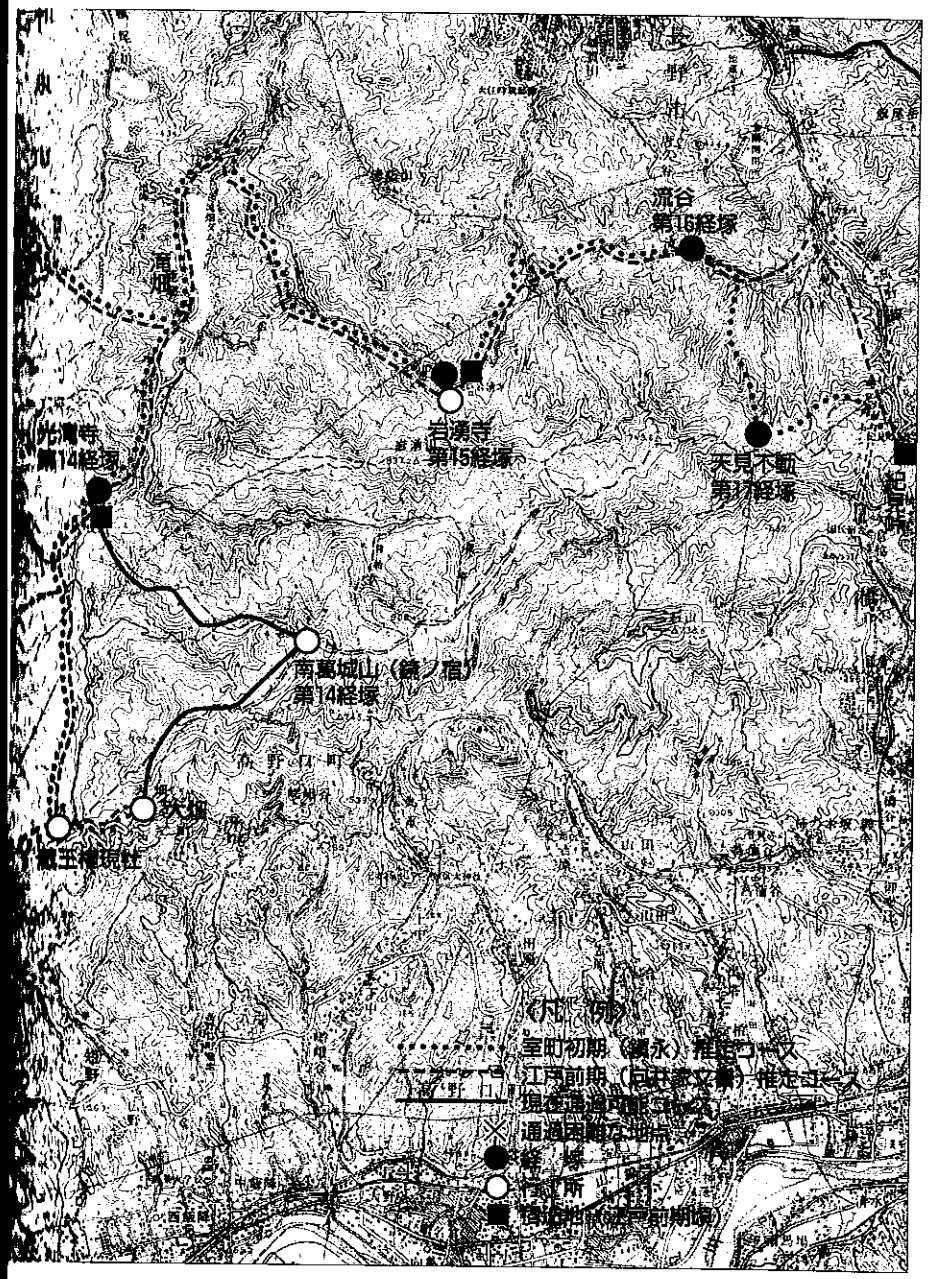
町屋の中程に修験の歴史をもつ観音寺があり、七越峠への町はずれの岩壁には役行者像が祀られ、鎖で登るようになっている。



大沢神社と神福寺跡（右）

父鬼町の役行者像


横尾山
大沢転法輪寺
鬼観音寺
牛瀬山
第10経塚
七越峠
経塚山
第11経塚
神野山
第12経塚
和泉葛城山
第9経塚
神野
五本松
鎌の滝
鎌の多
第13経塚
木の宿
アラトンの宿
第8経塚
中津川


流谷
第16経塚
岩湧寺
第15経塚
光滝寺
第14経塚
天見不動
第17経塚
紀
南葛城山（鎧ノ宿）
第14経塚
大畑
観玉神現社
〈凡　例〉
室町初期（観永）推定コース
江戸前期（貞享文書）推定コース
現在通過可能な地点
通過困難な地点
経　塚
行　所
信仰地（江戸前期頃）

〈凡　例〉
室町初期（鎮永）推定コース
江戸前期（向井家文書）推定コース
現在通過可能コース
通過困難な地点
経　塚
行　所
宿泊地（江戸前期頃）
大福山第3経塚
八畳山経
井関峠
行者堂
本恵寺
滑畑
塩谷
(b)
(a)
カシロ峠
鍋ノ峠
地蔵第4経塚
地蔵
鉈ノ子峠

大福山
燈明ヶ岳第8経塚
中畑
寺畑
押川
鍋来寺
志野峠第6経塚
松峠
中津川
地蔵
神道
ワラレの峠第7経塚